

第3部

港区平和都市宣言40周年

40 years



平和展
区内5会場で戦争や平和に関する
パネルや実物資料を展示

港区平和都市宣言40周年

40年のあゆみ

1985

港区平和都市宣言

原爆写真展（現在の平和展）の開始 **昭和60**
(1985)年度

港区平和青年団事業の開始 **昭和61**
(1986)年度

平和の女神像を設置

戦争・戦災体験集（第1集）を発行 **平成2**
(1990)年度

日本非核宣言自治体協議会に加入 **平成4**
(1992)年度

核実験等に対する抗議行動の開始 **平成9**
(1997)年度

巡回平和メッセージ展の開始 **平成16**
(2004)年度

区立芝公園内に「平和の灯」を設置
区立芝公園内に「被爆アオギリⅡ世・クスノキⅡ世」を植樹
平和啓発冊子、平和関連史跡MAPを発行 **平成17**
(2005)年度

戦争・戦災体験集（第2集）を発行
ミニ平和展セット貸出しの開始 **平成18**
(2006)年度

表参道に区政六十周年記念碑「和をのぞむ」を設置 **平成19**
(2007)年度

平和首長会議に加盟 **平成22**
(2010)年度

平和を考える集い（現在の平和のつどい）の開始 **平成25**
(2013)年度

戦争・戦災体験集（第3集）を発行 **平成27**
(2015)年度



戦争・戦災体験集
(第3集)



戦争・戦災体験集
(第2集)



戦争・戦災体験集
(第1集)



平和の女神像
港区役所新庁舎の開庁に合わせて
設置された。作：北村西望

平和のつどい（平和と音楽の祭典）

令和6年の平和のつどいの平和祈
念コンサート。東京室内管弦楽団
により、ウクライナの楽曲などが
演奏されました。



平和の大切さを考えるため、港
区平和青年団、広島派遣中学生な
どによる活動報告会や、広島の被
爆体験伝承者による講話などを実
施しています。

港区平和青年団

令和6年度港区平和青年団。昭和
61年度から現在まで、延べ364
人の青少年が活動してきました。



被爆地への派遣のための事前研
修を中心に、平和学習を通して、
戦争の悲惨さ、平和の大切さを学
び、広く地域に伝えていくことを
目的に活動しています。

平和の灯



平成17年度に、港区平和都市宣
言20周年の記念事業の一環として
区立芝公園に設置しました。「平和
の灯」に灯された「火」は、広島
市の「平和の灯」、福岡県八女市旧
星野村の「平和の火」、長崎市の「チ
ガサキ誓いの火」を合わせたもの
です。「平和の灯」のデザインは、
子どもたちからアイデアを募集し、
そこから得られたキーワードの「地
球」「火」を活用し、「水と緑の地
球に、核兵器の廃絶と世界の恒久
平和を願う火が灯されている」様
子を表現したものとなっています。

嬉しかった玉音放送

私の家は、田町駅に近い鉄道のすぐ側でした。……空襲では、本当につらい思いをしました。飛行機が屋根をすれすれにかすめていくときは震え上がりました。B29は焼夷弾やらガソリンのよなものをバラまいて飛び去っていき、その後は火の海でした。それが昼と夜の区別もなく続きました。熱くて熱くて、水をいくら体にかけてもすぐかわいてしまい、どうしようもありませんでした。防空壕に入っても怖くてしかたがありませんでした。芝公園に避難したときは、かえってそっちの方面がひどくて、もうこれで死ぬのではないかと思ったほどでした。明け方帰ってきた時には、家はすっかり焼き払われどこかわからないほどで、しばらくは防空壕の中で生活しました。近所の人は何人が焼死し、私たち家族はよく生きていたとつくづく思いました。

天皇陛下の声をラジオで聞いたときは、本当にこれで戦争が終わったと思い、涙がでるほど嬉しかった。戦争が終わればもうこんなひどい目にあわなくてすむと思ったからです。

旧芝区 — 田町駅／芝公園
第1集 P・92
坂井かねさん



空襲の体験

私は生まれたときから現在の高輪の地にずっと住みつけ、同じ場所から戦前、戦中、戦後の移り変わりを見てきました。戦争のときもここで空襲を体験しました。……終戦の年、昭和二十年に入ると、弟や妹は学校から集団疎開しましたが、私は両親と東京に残っていました。三月十日の大空襲のときは、寝てまもなくたたましい高射砲の音で目がさめました。一階が上がって見ると、隅田川の方角に、あちこち火の手が上がり、たちまち融合して一つになりました。そのあと風下のこちらにも火の粉が飛んできて、消して回ったことを覚えています。いつもと違って低空で飛ぶB29のジュラルミンの機体に、燃える炎が反射して真っ赤に見えたのが印象的でした。

山の手が本格的に焼けたのは五月の空襲でした。当時、中学生には軍事教練が課せられ、五月の下旬には我々は富士の裾野におりました。空襲の夜、誰かの叫び声に外に出たら、東京の方の空が赤々と染まっていました。それをみんなただ呆然と見ていました。

旧芝区 — 高輪
第2集 P・57
横尾敦夫さん



大空襲

昭和20年5月25日の深夜、両親にたたき起こされ家を飛び出しました。芝中門前二丁目9番地、現在の芝大門二丁目7番、目指すは芝公園の防空壕、直線距離で300メートル弱あります。6歳7カ月の私は、着の身着のまま一人で走りました。空を見上げると、深夜なのに空一面真っ赤に染まり、北風によって火の粉が流れていく様は、筆舌に尽くせません。防空壕に入ってから数時間、空襲警報解除のサイレンが鳴り表に出た時、真向かいの増上寺の御霊屋がものすごい音と炎で燃えさかっているのを目のあたりにした時、身動きできずに眺めていました。……思いかえすと、防空壕まで逃げる途中、B29（爆撃機）らしき飛行機が2〜3機飛んでいるのも目撃しています。そして五重塔の3階付近に焼夷弾が当たり火を噴いている光景も見ました。この時の空襲では山の手一帯が焼け野原になったそうです。

戦争とはいえ、民間人が何故このような被害を受けなければならないのか疑問です。戦争の本質が間違っているというより、戦争そのものを否定しなければなりません。

旧芝区 — 芝公園
第3集 P・140
椎名武司さん



戦争・戦災体験集を ふりかえる

第1集から第3集まで

平和都市宣言から40年。これまで発行された3冊の戦争・戦災体験集から、インタビューや手記（一部抜粋）をいくつか紹介します。



地図で 読む 旧芝区



芝区役所 (出典:『東京都港区旧庁舎記録保存集 概要・写真・図面』)

地図で読む 旧麻布区



麻布区役所 (提供：東京都立中央図書館)



旧麻布区 — 霞町

第1集 P・50 一ツ松多根さん

04

霞町が半分残った

四月十八日より東京も大空襲となりました。わが町、霞町周辺も、五月二十二日夜半に、焼夷弾があちこちにばらまかれ、前側の家に落下されました。私は隣組の群長として、鉄兜(てつぼう)にもんぺ姿でバケツおくり(くわ)に活躍しました。……井戸水を力一杯汲出し、類焼を防ぐため、その附近の家々に水をかけはじめました。朝の六時頃まで夢中でした。やっと町の中が静かになり、再び表通りに出ました。何と私の家の疎開の跡地が空地であつたため、炎の力も弱まり霞町の街が半分残つたのでございます。その時の感激は忘れられません。私は全身の力がぬけて、我家にもどりました。それから間もなく、前の家のご主人がこわれた物干しに、バケツ位の大きさの物があると云つて、それを持出し道路においたと同時に爆発し、玄関のガラス戸がこわれ、爆風で顔と頭にガラスの破片がささり怪我をされ、前田病院から顔中包帯を巻かれ帰つてこられました。

一夜にして炎となり町が消えかかった恐ろしい夜の戦いでした。

旧麻布区 — 広尾町

第2集 P・148 秋葉幸雄さん

05

焼夷弾が足元に

私は麻布の広尾町八番地に、三十年位住んでいました。港区の空襲での飛行機の編隊規模は、だいたひ東京大空襲と変わりません。……昭和二十年五月二十三日、私が住んでいた目の前の家に焼夷弾が落ちました。たまたま不発でした。ちょうど私は道路にいて、足元に焼夷弾が散つてきたのです。本当に九死に一生を得ました。だから、運が良かったんですね。焼夷弾は、六角形の小さな筒ですけど、直撃されていればもちろん即死です。もうびっくりして、……空襲警報が解除になつてやつと、「ああ、生き延びたな」と思いましたよ。また、私の家のはす向かいの二階建ての家に焼夷弾が落ちて、二階の部屋が燃え上がりました。それで父親と隣組のみんなでバケツでリレーをして、父親が一階の屋根から水を掛け、消火活動をして消したんですよ。運良く焼け野原にならずに済みました。都電通りを挟んだ真向かいの商店、屋敷、お寺、住宅等が焼夷弾で戦災にあつて焼けましたね。すぐそばの児童養護施設も戦災にあつて、一部を残し焼けました。日赤の産院は無事でした。

旧麻布区 — 谷町

第3集 P・110 安藤重男さん

06

麻布谷町にて

谷町は霊南坂やアメリカ大使館とほど近く、房総半島から飛来してくるB29の進入口に当たり、夜間に昼間のように明るい照明弾を落としていたこともありました。戦時中の焼けた谷町界隈(がひんがいの)の写真を見ると、アメリカ大使館だけ残っているのが見て取れます。きうと大使館の場所を確認したのでしよう。ある日の昼間空高くやってきたB29に日本の戦闘機が体当たりし、そのまま墜落していくのを目にしました。もちろんB29は悠然と去っていったのは言うまでもありません。昭和二十年三月十日の東京大空襲の時は被災を免れたわが家も、五月二十五日の山の手空襲の時、焼夷弾(やうりだん)こそ落ちてはきませんでしたが、溜池方面から火が燃え広がり、とうとう焼け落ちてしまいました。その際持ち出した大きな真空管ラジオは、戦後に米2升と交換できました。その買い出しは、栃木の野州大塚(のしゅうおおくさ)へ何回も出かけたものでした。ある時交換を終え、家に戻る途中、栗橋駅で二斉取り締まりがあり、泣く泣く米を列車の窓から捨てたものでした。手だけは取られませんでした。そのうち買い出しは何を持って行つても交換してくれなくなり困り果てました。

地図で読む 旧赤坂区



赤坂区役所 (提供：東京都立中央図書館)



旧赤坂区 — アメリカ大使館

第1集 P・60

御子柴孝一さん

07

命を救ってくれたハシゴ

長く尾を引くサイレンの音が鳴り止まぬ間に、敵機の爆音が頭上を通過した。低空を飛ぶ銀色の機体が驚くほど大きく見え、弾倉が開いて、バラバラと投下する焼夷弾が斜めに頭上を落下し、民家の屋根に吸い込まれてゆく。赤坂田町方面に発生した火災は黒煙とともに燃え盛っている。……一瞬、空を裂く落下音とともに周辺は焼夷弾で包まれた。我が家の屋根を貫いた一弾は玄関で破裂し、同時に白い油脂が四方に飛び散り、直ちに発火し燃え広がった。この町内には、消火に従事する男手も女手もほとんどなかったため、消火に立ち向かう術もなく焼けるにまかせるだけである。

煙と火に追われ、火勢の弱い場所を選びながらいつしか大使館の石塀まで来ていた。塀は高く飛び付ける高さではない。夢中で塀にそって逃げてゆく前方にハシゴが立ってかけてあるではないか。この場所に誰かがかけたのかと不思議に思ったがそんな事を詮索する余裕はない。神の助けとばかり館内に飛び込んだ。このハシゴが私の命を救ったのである。広い館内は別世界で、吸う空気が何と美味しかったことか。まさに蘇生^{そせい}の思いであった。

旧赤坂区 — 南青山

第2集 P・167

斎藤恭子さん

08

焼死体が人形の大きさに

五月二十四日から二十五日の未明にかけての一晚のことです。何といたのですか、火の粉というか、焼夷弾のすだれみたいな爆撃でした。家から今の南青山六丁目 全部向ここの原宿までずつつと焼けて見えました。……青山墓地の続きの小さな墓地に行きました。そこに行つて、谷になっている所の土手の途中に、持っていたスコップで穴を掘りましてね、それで三層くらい^{じゅうさん}の絨毯^{じゅうたん}（逃げる時に水にぬらし、木製の台車にのせて持って行ったものです）を敷いて、母と父と私、三人で穴に入りました。……夜が白々明けてきて、父がもう大丈夫そうだから帰ろうかって言つて、小学校の傍まで行つたら、一メートルくらいのお人形さんが、学校の門の前に落ちていゝんです。なんでこんな所にお人形さんがいるのだろうと思つて、母に「何でお人形さんがいるの」って言つたら、「見ちゃだめ！」って、母が私の顔を袂^{たもと}で陰に隠すんです。後で聞いたら、背中に刺青がある男の方の焼死体です。……ちらっとしか見ませんでしたけど、「あれはあなたには見せたくなかった」って後から母が言っていました。

旧赤坂区 — 赤坂／青山

第3集 P・111

小嶋康男さん

09

戦時下の小中学生と港区内での空襲体験

青山一丁目方向はもう火の海で人々がほとんどこちらへ逃げてきます。……その青山方向から裸馬が数頭一団となって赤坂見附方向へ狂つたように走り去りました。青山一丁目の師団司令部から逃げ出した軍馬だと思ひますが、この無人の馬を見た時、ああ僕たちも死ぬんだと思いました。そのうち台風のような強風が吹き出し、火の粉が赤い吹雪のように真横から吹きつけてきました。その場にいた大勢の人たちは、火の粉をよけるため赤坂御用地の空堀^{くぼり}今は埋められていますへ身を潜め、服につく火の粉を払いながら、「これ以上火勢が強くなつたら火の気の少ない御所の中へ土手土手って入りこも」と皆でそつ言っていました。事実、1人の勇氣ある男性が土手を乗り越えて御所のやみの中へ入って行きました。そして間もなく信じられないことが起きました。固く閉じていた正門が開き警備の将校が出て来て「荷物を持ち込まなければ入つてよい。これは殿下の御命令である」と大声で呼びかけました。その場にいた数百人の人たちは私たち家族を含めて全員が命を助けてもらいました。

テーマで読む

戦争の記憶が今よりも生々しい時期に取材された、第1～3集の戦争・戦災体験集では、軍隊や外地、原爆などを体験した、より幅広い内容の証言もたくさん載せられています。



貯水池の丘 神谷町方面をのぞむ(所蔵：港区立郷土歴史館)

軍隊・軍属——ぐんたい・ぐんぞく

第1集 P・186

大場一広さん

涙のダモイ（帰国）

「ストローイ、ストロー、（整列）」の音が募舎に響いてくる。ソ連抑留中、毎朝ラーグリー（収容所）で聞かされた言葉である。ここナホトカの砂浜に並んでいる募舎の中には、いつ帰国できるかも知れない旧日本兵達が生活しているのである。帰国の期待を持ちつつ「日本へ帰れるなら、何回でも整列してやらあ」と自嘲気味に、外に出て整列をはじめ。

軍隊で仕込まただけあつて、四列縦隊で約二百名が即座に整列をする。ソ連兵は掛け算が出来ないのか、せつかく四列に並んでいるのに、一人ひとり「アジン、ドウアー……」と数えていく。日本だったら四掛ける五十で二百となるのは、小学生でも知っているのに何と間が抜けているのだらうと思った。

全員を数え終って確認したのでらうか、今度は「サーガンマルス。」の声と共に行進が始まる。ナホトカに集結してから、ソ連兵の号令によって行進するのははじめての出来事である。

隊列を整えて砂浜を行進するのは、楽なことではない。一年半にわたって、ラーグリーでの食事は、少量

の黒パンにスケトウダラと、少々砂糖しか食べていない身にはつらいことであつた。抑留中の作業は道路修理をはじめとして、森林伐採が主な仕事であり生きながらえるだけの体力しか保てなかったのである。尻の肉はゲッソリとやせてしまい、ふくらはぎの筋肉は肉はなくて筋が腰に着いているだけで本当に骨と皮の体格になってしまつていたのである。

何のために行進するのだらうか。ソ連兵は「ダモイ、ダモイ、ヤボンスキー（日本人）」と言っているが、このダモイの言葉には真実がなく、何回もだまされ続けていたのである。その最初は、北朝鮮の興南から約千人の集団で「ヤボンスキー ダモイ」と言われタンカーに乗せられ、着いたところがウラジオストク。それから貨車に乗せられても「ダモイ」トラックに乗って北上してもまた「ダモイ」何時も「ダモイ、ダモイ」と言つては移動ばかりさせられていたので我々にはどうしても信ずることができなかったのである。

ところが、砂浜から突然コンクリートの道へと移り、波止場に到着する。でも本当に帰国できるのかとまだ半信半疑である。波止場には三千トン級の貨物船らしいのが停泊している。目をこらして見ると船体に白字で「大俣丸」と書かれているではないか。黙々と行進してきた隊列から、ぐよめきの声が出はじめる。「これは本当に帰れるらしいなあ」とか、「本当のダモイだ。」「丸と書いてあるから日本の船だ」と。

大俣丸に近づくと舷側には満艦飾のように桜の造

船上の人となつて出迎える看護師さんにお礼を言

おつと、口を開いたら「アアリリガトウゴゴ……」。と、あとは言葉にならない。

落涙・嗚咽・号泣・慟哭。すべてが帰国できる確信の絶叫だつたと思つている。

昭和二十二年四月二十六日。大俣丸は静かに舞鶴に入港した。

第2集 P・94

田中清之助さん

戦争の忘れられない三つの記憶 空襲で実家を失う

私は、昭和二十年（一九四五年）月慶應大学在学中に、軍隊の物資を輸送する輜重兵科の幹部候補生として入隊しました。終戦の年で本当に戦争の末期でした。

戦争中、心に強く残っていることが三つあります。

私が軍隊におりました時、今の西麻布、昔の麻布区箕町（こさかまち）の家が三月十日の大空襲で焼きました。幸い父母は無事でしたが、次週の外出日に、自分の育った家が跡形も無く焼けたのを見て、涙をおさえることができませんでした。軍隊に帰って、教官にその話をしました。すると教官が、「家を丸焼けにされた仇討ち（あだ）をする気持を強く持たないと駄目だ」と言い、その夜の会合で仇討ちを決意した話をさせられました。私は別にそういう意味で教官に話したわけではなかったのですが……。

敵国兵も同じ思い

もう一つは、B29の乗組員の話です。四月頃のある日、輜重兵学校近くの経堂のあたりがB29に爆撃されました。経堂には高射砲の陣地があり、そのうちの一機が撃墜されたのです。乗っていたアメリカの搭乗員が、輜重兵学校の中に、パラシュートで降りてきて捕まりました。

それで学校の事務所に、私と東大出の戦友の二人が呼ばれ「お前ら、行って尋問しろ」と言われたのです。出掛けて行ったら、そのアメリカ兵隊の若いこと。我々も学校の途中で軍隊に入隊したわけですが、アメリカでも同じだなと思ひました。そして「幾つだ？」と聞いたら、「十九才だ」と答えました。十九才で、B29の搭乗員として連れて来られるのかと思つて、驚きました。「基地はどこだ」「君たちの基地にいる爆撃隊の編成はどのくらいだ」、色々聞きましたけど、全部笑いながら、「知らない、知らない」って言うだけでした。東大の戦友が、「これは作戦変えなきゃ駄目だ」と言つて、軍の話を止め、プライベートの話にしました。そうしたらここに笑いながら「自分は軍隊志願したけれども、実はフィアンセがいる。無事に帰れたら、結婚する約束になっている」、本当に、人が変わったみたいに話し出しました。だんだん話をしている間に、「戦争は嫌だ。人と人が殺しあうなんて」と言い始めました。B29の搭乗員でも若い連中は、早く戦争が終わり、軍隊から抜けて幸せな結婚をしたいという願

いなのだと思いました。ですから尋問しながら、戦友と顔を見合わせました。可哀相で、「お前は死刑になる」とは言えなかったのです。最初は言わつと思うけれど、プライベートな両親と家族の話とか色々されると、「お前はもうすぐ殺される」とは、とても言えなくなりました。尋問を終えて「さようなら」と言つと、「また会おうね」と答えました。私たちは到底言葉を返せませんでした。翌朝、この若者は憲兵隊に連行され、刑場で命を落としたことと思います。私の軍隊生活の中で、とても辛く忘れられない出来事です。

母の背中の亡き骸

もう一つは、三月十日の東京大空襲です。その時は、死体の収容という特別任務をやらされました。私たちの配属された所は、両国、錦糸町、亀戸、新小岩、小岩辺りでした。両国の国技館は焼け落ち、跡形もない有様で、見ていて寒気がするようでした。小岩から少し先で車を止め、あたりの様子を見ますと、見渡す限りの焼け野原でした。家を失った人たちが皆わあわあ、わあわあ泣き叫んでいました。私たちは一時間くらい歩いて様子を見ました。その時、目の前の防火用水らしい水溜りの中に、お母さんが赤ちゃんを背中に背負い沈んでいるのが見えました。お母さんはうつ伏せになっていましたが、赤ちゃんは仰向けになっていて、顔が分かるわけです。まあ、何とも言えないあどけない、その赤ちゃんの亡き骸を

見ている間に、本当に悲しくってねえ。自分は今の軍隊にいるけれども、戦争はこんなに惨たらしいものかという気持ちが強くなり、涙をおさえて車の荷台に、その赤ちゃんとお母さんの亡き骸を運び入れました。荷台が一杯になると、死体の仮安置所に運びます。

私たちは担当箇所が終わりまして、帰ろうとする、ぎよつとしたのです。火に追われた人たちがみな隅田川に飛び込んだのです。隅田川はもう二面に死体が浮かんでいる状態でした。それを町の人たちが、先端にカギのついた棒で引っ掛けて引っ張り上げ、死体の山が出来ていました。焼け跡のお母さんと赤ちゃんの姿、ブカブカと面に浮いていた隅田川の死体。大勢の人が、不幸せになる戦争は決してやっではいけないもので、この日に見た情景は恐らく一生忘れられないと思います。

子どもたちへの平和の思い

終戦後、塾長の潮田江次先生から、「田中君、ずいぶん大勢の先生が亡くなられたので、よかったら幼稚園の先生になつてくれないか」と頼まれしました。空襲で被害に遭った先生、戦死された先生など、大勢の教職員の方々の欠員があり、私は恩師吉田小五郎先生のお薦めにより幼稚園への奉職を決意しました。そして、学級担当として昭和三十九年、卒業国内旅行で広島に行き、子どもたちは泣いておりました。私は連れて来てよかったと思いました。子

供たちに戦争の恐ろしさを知ってもらったからです。その次のフランスの修学旅行の時は、長崎に行きました。慶應の創始者、福沢諭吉先生の故郷が九州の中津だと言つことと、長崎の原爆の跡を尋ねて、亡くなった方のご冥福をお祈りしようという二つの目的でした。子どもたちに空襲の恐ろしさを知らせ、戦争は絶対にしてはいけないということとを今後も伝え続けたいと願っています。

外地

——がいち

第1集 P・74

伊奈修一さん

明暗を感じた一日

戦後四十五年、戦争の生々しい記憶もうすらいでくる昨今、私には忘れられない体験がある。それは毎年八月十五日が来ると、鮮やかによみがえる。当時、父が満鉄勤務であったことから旧満州で生まれ育った私は、終戦の日を大連で迎えた。十歳だった私は、その日ラジオから流れる玉音放送を正装正座で聞いたことを覚えている。午後、いつものように表へ遊びに出かけた。近所の日本人の子供達と石けり、輪投げ、縄跳びなどに熱中し、それを現地の子供達がいつもつらやましそうに遠くから眺めてい

るのを得意がつていた。その日はあまりに夢中になっていたためか、ふと気が付くと仲間達は皆帰つてしまつたとみえて自分人になっていた。そろそろ帰ろうと思ひ自宅の方に向いかけたが、まわりの様子が何かおかしい。よく見ると、今まで離れた所にいた現地の大人・子供十人ぐらいが手に手に棒切れを持って、私をとり囲みじわりじわりと迫つて来るではないか。なんの覚えもなかったが、とつさに身の危険を感じこの場から逃れることに集中した。ちょうど、私は学校の塀を背に立っていたので瞬間、身をひるがえしてその塀に飛びつき、二メートルの高さをよじ登り校庭内に飛び降りた。

連中がどつと押し寄せたのとほとんど同時だった。私は夢中で校庭を横切り反対側の塀から市電通りに面した道へ転がり落ちた。民家の裏通りをいくつも曲り必死で走るうち、追つて来る声もだんだん遠くなっていった。私は子供心にも走りながら考えた。戦争に負けたんだ戦争に負けたんだと。昨日までは、現地の子供達を無視して、したい放題の遊びをしていた日本の子供達が彼らは憎らしかつたのだろうか。お昼のラジオで日本が戦争に負けたことを知つたが、それがどんな意味をもつのか理解するのは無理だった。

無我夢中でたどりついたのは、自宅から二キロメートルほど離れた伯父さんの家だった。その夜は泊めてもらったが、もし、あの時逃げ切れなかつたら今頃どつなつていたかと思うと興奮して寝つ

かれなかった。あとで聞いたところによると、同じようなことが至る所でおきたということである。

この日を境にして、表を出歩く日本人の数は、特に夜半などはほとんどいなくなった。子供の私達も、表へ出るのは学校へ行く時ぐらいで、それも身の安全のため中国の保安隊という隊員さんが常時ついてくれたのである。しかし、半年後には学校も閉鎖され、引き揚げまでの約一年間、家の中に閉じ込められる日が延々と続いた。このことは、帰国後もしばらくの間、逃げ回る夢を見て夜中に目を覚ますことが何度となくあった。たった一日で、のびのびとした生活から逃げ回る生活へと変つた。

戦後半世紀近く経た今日ではあるが、毎年、八月十五日が来るたびにこの体験が、強烈によみがえるのである。と同時に、戦争のない国、平和な国がいかに幸福であるかということとを、この体験を通して学んだのである。

空襲

——くうしゅう

第2集 P・55

矢沢咲子さん

東京大空襲

忘れることができない、昭和二十年三月九日、夜

の大空襲。あれから六十年余の月日が経ちました。

あの夜、いつもの様に家族揃つて食卓を囲み、さやかな夕食を、済ませた直後のことでした。警戒警報を知らせる不気味なサイレンの音が鳴り響きました。その音と同時に、「ジー」と言う風を切るような音、空を見上げるとB29爆撃機が何機も近づいてきて、低空飛行で爆弾を雨が降るようにバンバン投下してきました。その度に、あちこちから火柱が上がり、すごい地響きと爆音が、聞こえてきました。人々は、激流の様に流れる炎と、熱風を避けるのに必死で逃げまわりましたが、炎は容赦なく逃げ回る人々を追いかけて、着ている衣服、持ち物に燃え移りました。

火だるまになった子供を抱きかかえ、半狂乱になつてしまった母親の姿、我が子の名前を呼び続けて泣き叫んでいる人、やけどで皮膚がただれてしまった人、頭から血を流して、助けを求めている人……生き地獄としか言えません。この時の恐怖とショックは、今でも忘れられません。あの日の夜は、一夜で十万人もの尊い命が奪われ、三百万人の人々が罹災したとか……。

我が家の八人家族は九死に一生をえて、三月十日の朝を迎えることができました。運がよかったのか、神に守られていたのか……いいえ、母の愛が私達家族の命を救ってくれたのです。

その夜、父はサイレンの響きと共に、妻と子供達を残して職場に飛んでいきました。どんなに後ろ髪

を引かれる思いだったでしょう。そんな母には、六人の子供達を守らなければいけないと思う使命感があったのだと思います。家の前にあった防火用水からバケツで水をくみ出しては、子供達の頭（防火頭巾に水を何回も掛けてくれました。飛び散っている火の粉だけは、なんとか避けられました。

近所の人達は早々と逃げてしまいましたが、母は家の前から、逃げようとしませんでした。取り残されたのは、私の家の家族だけでした。母はこの場所で、みんな一緒に」と、死を覚悟していたのだと思います。父が探しに来た時に、すぐ判る様にと、父への思いやりだったのかも、知れません。

とうとう我が家にも火が燃え移り、家が崩れだしました。その時、身の危険を感じた母は、腰に結んでいた二本の紐（ひも）を目の前に出し、

「みんなこの紐に掴まって！ 離してはだめだよ」と叫び、母を先頭に紐を強く握りしめ、隅田川の近くまで逃げました。風と、煙と、熱風で、眼を開けていることも困難でした。喉も熱気でひりひりと痛く声も出ません。でも、そんな中、母は命懸けで子供達の名を呼び続け、励ましてくれました。一本の紐が、家族を結び命綱でした。川まで、わずか一キロ程の距離でしたが、突風二十五メートル（当時の記録）にあおられ、一歩前進、三歩後退で目的地にたどり着くまでは大変な苦労でした。ところが、やっとの思いでたどり着いた隅田川は、火の海で、川に一緒に飛び込むつもりだった母は、そこで思い留まった

全員集合！ 校長先生より「広島方面に爆弾が投下された」と訓辞があった。全員で下校した。お寺に着くと、ものすごい雨が降り出した。

しばらくして、広島方面より、火傷をして顔が黒こげになった人、黒こげの荷物を載せた大八車、リヤカーなどが押し寄せた。我々は防空壕の生活だったが、蒸し暑くて中に入っていられない。友人と、学校が避難所なのでこっそり抜け出してのぞきに行った。その時の異臭は忘れられない。

8月末に帰宅することになった。寮長より、今まで隠していたことがあると告げられた。両親死亡2組、片親死亡3組。その中に私が入っていたようとは。大好きな福原先生が私の横に座っておられたので納得した。トラックの中で泣きじゃくり、涙がなくなった。

母が、たしか6月に慰問に来た。本堂で寝泊まりをしていた時だったが、母が虱（みゆし）を見つけて大駆除。寺の平釜で湯を沸かし、全員下着等を煮沸し、干す。母が最終バスに乗り遅れて泊したが、甘えることはできなかった。残念！ 9歳の子どもに、死が理解できますか？

被爆の日、母は勤労奉仕で爆心地にて作業中だった。帰宅して4日間生きていたが、私は死に目にあえなかった。妹が、母は苦しんでも妹の体は放さなかったと、70年目の年に初めて語ってくれた。美人の母で、子どもながらに自慢でした。

父親が死ぬ1年前に、母の遺品5点を広島平和記

そうです。ここでも母の決断が、一命をとりとめたのです。コンクリートのわずかな壁の隙間に、家族が身を寄せ恐怖に震えている時に、隣に並んでいた倉庫のドアの開く音が聞こえ、私達は助けを求め中に入れてもらいました。倉庫の中には、五、六家族がいたでしょうか、父のいない不安から少しほっとしたことを、覚えています。ところが、倉庫の中でもあちこちから炎が上がり、その度にみんなでバケツリレーをして火をくい止めました。

そして悪夢の一夜が明けてみると、見渡す限りの焼け野原、あちこちでまだ燦（きら）つていたり、水が吹き出していたり、すっかり光景が変わってしまいました。私達の顔も煤（すす）で真っ黒、眼は真っ赤、お互い生きていられたのが不思議で、助かった人々と、抱き合って泣きました。真っ黒になって、転がっている死んだ人達の山、まるで、マネキン人形の様でした。もちろん、男女の区別などつきません。翌朝、こんなひどい光景を見ながら、家族の安否を確かめに帰ってきた父は、一家全滅を覚悟したそうです。全てを失ってしまった悲しみに、父は焼けた家の前で呆然（だいてん）と立っている所を、母が発見しました。父への思いが、通じたのでしょうか。父の姿を見て、私達も父の懐（なつ）に目散（みり）に飛び込んで行きました。父は、「生きていてくれたのか、ありがとう。ありがとう。」と二人を抱きしめてくれました。母には感謝の言葉も出ず、ただ手を握り合ったまま涙、涙で声になりませんでした。あの時の『父の温もり』は、私の体の中に生残つて

念資料館に寄贈した。永久保存になっている。これからも港区被爆者の会で核廃絶運動の手助けを致したいと思っております。戦争は一度と嫌だ！

第3集で手記を寄せていただいた高木恭之さんから、改めてコメントをいただきました。

私自身の核廃絶への思いは今も変わりません。日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会）を組織する東友会（東京都原爆被害者協議会）の一員として、現在も街頭で核兵器廃絶の署名を呼び掛けています。

周りの方々の意識は、令和6（2024）年に日本被団協がノーベル平和賞を受賞してから変わったように感じます。例年よりも署名の数が増え、署名の際には「おめでとうございます」と声を掛けていただくこともあり、皆さんの気持ちをとて嬉しく思います。

テレビのニュース速報で受賞のことが知った夜は、興奮してなかなか眠れませんでした。ノーベル平和賞を受賞できることは夢にも思っていなかったのですが、今までの活動が着実に、一歩一歩前に進んでいるように感じました。

10年前は、港区被爆者の会（港友会）としても活動していましたが、メンバーが徐々に少なくなり、昨年（令和6年）3月に閉会しました。

いる大切な宝物です。母の判断力と決断力が、家族の命を救いました。『母の愛は深く、母は強い』です。あらゆる苦難を乗り越え、六人の子供達を育ててくれた母も、老後は子供や孫に囲まれ、穏やかな日々をおくり、八十八才の天寿を全うし、父の眠れる地に安らかに旅立っていきました。

戦争は、人を傷つけ悲しませ、なんて悲惨なものでしょう。一瞬にして命も物も奪ってしまう戦争は、決して起こしてはいけません。人類のためにも、この地球上に戦争のない平和な日々が訪れることを願うてやみません。

原爆 — げんばく

第3集 P・185

高木恭之さん

広島に原子爆弾が投下され母と死別母をかえせ！

昭和20年8月6日、広島に原子爆弾が投下された。私は9歳だった。国民学校の学童疎開で安佐郡戸山村浄宗寺に疎開していた。

ちやうどその時は月曜日の修身の授業中だった。窓越しに広島方面を眺めていたら、きのこ雲がちやうど目に映った。と同時に、ドーンと聞こえた。即

学童疎開の対象学年未満で、母と同じく広島市内で被爆した妹も、昨年末に市内の自宅できっと亡くなりました。体への被爆の影響を心配していたこともあってか、結婚はしていませんでした。

戦後80年を迎える中、被爆者は高齢化し、今なお元気で活動されている方もいますが、被爆2世、被爆3世の方が意志を継いで活動を続けてくれています。署名の呼びかけにも多くの若者が応えてくれます。

若い方々には、とにかく戦争は良くない、原爆や水爆は二度と使ってほしくないということを伝えたいです。私自身、母を亡くしているため、原爆のことが頭から離れたことがありません。育ち盛りの時期に母を失い、母親というものの経験がないことで、どうともしがたい気持ちもありました。こういった体験や思いを風化させないためにも、将来に語り継いでいってほしいです。

あ

愛国婦人会……あいくんじんかい 明治34（1901）年に発足した、戦死者遺族や傷痍（けが）軍人に対する慈善活動を行う団体。昭和17（1942）年、大日本国防婦人会、大日本連合婦人会と統合して「大日本婦人会」になった。√46

赤紙……あかがみ 「召集令状」を参照。√17・19・74

慰問袋……いもんぶくろ 出征兵士を慰めるため、地域の婦人会や学校単位で中に日用品や菓子、娯楽品、励ましの手紙などを入れて送った袋。√36・163

隠匿物資……いんとくぶつし 不正に隠された物資のこと。戦時中の物資供出や買い上げなどにより、軍や官庁などに蓄えられていた大量の食糧や燃料、貴金属や鉄鋼などを、軍人や政治家、官僚や警官などが、敗戦時の混乱に乗じ不正に隠し持っていたことが、戦後明らかになった。

栄養失調……えいようしちょう 体の健康を保つのに必要なエネルギーや栄養素

玉砕……ぎみくさい 軍隊が全滅すること。戦時下では消極的な表現を避けるために名誉や忠義を守って潔く死ぬという意味でこの語が使われた。昭和18（1943）年5月にアッツ島で日本軍が全滅して以来、軍部は全滅を玉砕と呼ぶようになった。√22・24・83・168

極東国際軍事裁判……きょくとうくわんこくさうぐんさうさふばん Potsdam宣言にもとづいて、日本の戦争犯罪を裁くために開かれた国際裁判。連合国11か国の裁判官で構成された。昭和21（1946）年から昭和23（1948）年にかけて、東京市ヶ谷の旧陸軍省で開かれたので、東京裁判とも呼ばれる。満州事变以降の日本の軍事行動が侵略戦争とされ、戦争犯罪を問われた国家指導者のうち25人が有罪となり、戦時中に首相だった東条英機ら7人に死刑判決が下された。√52・54

金属類回収令・金属供出……きんぞくしゆいしやう 戦争の長期化に伴い、政府は軍需物資としての鉄、銅を確保するために金属類回収令を昭和16（1941）年9月に発動した。これにより、家庭を含め身の回りの金属製品や金員の回収が実施され、神社、

が、十分に摂れていない状態のこと。体力や抵抗力が著しく低下し、病死を招きやすくなる。戦時中は物資が極端に不足したうえ、食糧も統制されたため、国民の多くが栄養失調に苦しんだ。戦地においても、食糧不足は深刻で、日本の戦死者の多くは、栄養失調による病死や餓死によるものとされる。√71・75

か

外地・内地……がいち・ないち 明治以降、日本の本来の領土を〈内地〉、それ以外で第二次大戦まで日本が支配した領土を〈外地〉と呼び、対照させていた。いわゆる植民地だけでなく、戦争中に占領した土地なども含まれる。外地には、台湾や朝鮮での総督府や、樺太庁、関東庁、南洋庁といった日本の行政機関が置かれていた。√47・52・86・92・125・173

学徒出陣……がくとしゅつじん 昭和18（1943）年10月、戦局の悪化により、大学・高等学校・専門学校（生徒（学徒）の徴兵猶予が停止され、主に文科系の学徒が同年12月に軍隊に入隊したこと（理工系などは入隊が延期された。

寺院、教会なども例外ではなかった。一部では鉄道の線路まで供出された。戦局が厳しくなってくると鍋や釜までがその対象となった。√63・73・143・163

勤労動員……きんろうどういん 戦地に働き手となる男子が送られたため、労働力が不足した農村や工場に14歳以上の男女が勤労奉仕する義務が昭和16（1941）年に法制化された。強制的な無償労働で、隣組や学校などを通して実施された。徴用ともいう。√40・43・58・82・121

空襲警報……くうしゅうけいほう 敵機の来襲が確定となったときに鳴らすサイレン。戦争末期、爆撃が激しくなると、空襲の開始と警報が同時のことも多かった。√27・42・73・83・134・144・163

軍国主義……ぐんこくしぎ 戦争の勝利や軍勢力・軍隊の強化が最重要とされ、政治や経済はもちろん、教育や文化、生活様式、思想までもが軍事化されている体制。√77・83・124

（軍事）教練……ぐんじ きょうれん 大正14（1925）年から、中学校以上の学

その前後に学校の修業年限が短縮されて、通常より早く卒業させられ入隊したことも含めている場合がある。√20・58・177

学徒動員……がくとどういん 学生・生徒を対象に行われた勤労動員のこと。日中戦争以降徐々に拡大され、戦争末期には、授業が停止されてもっぱら軍需工場などへ動員された。「学徒出陣」を含めて「学徒動員」という場合もある。

学童疎開……がくどうそかい 戦争末期、都市の国民学校の生徒を空襲の危険から避けるために農村部へ移動させたこと。東京からは約20万人が疎開した。しかし疎開先の食糧事情は悪く、栄養失調やシラミに悩まされた。親戚などを頼った縁故疎開と学校単位の集団疎開とがある。√40・41・43・44・45・75

機銃掃射……きじゅうそうしや 機関銃の銃口を動かし敵をなぎ払うように射撃すること。空母に搭載された戦闘機からの機銃掃射を受けた例が多い。√26・127・144・161・166

軍需工場……ぐんじようじょう 戦争に必要な武器、爆薬、航空機、車両などを製造・加工する工場。√40・114・121・145・173

軍属……ぐんぞく 正規軍人ではないが、軍人に準じて戦争遂行のためのさまざまな任務にあたった人の総称。√196

警戒警報……けいかいけいほう 敵機の来襲は確定であるがどこを攻撃するかはまだわからないとき、進行方向の地域で鳴らしたサイレン。確実性が高まると空襲警報に切り替わる。√27・42・83・146

経済統制……けいぎとうせい 自由な経済活動を制限すること。日中戦争が始まり〈国家総動員法〉が公布されると、戦争を遂行するために、企業の生産や流通、販売は制限され、戦局の長期化によって、一般国民の消費についても統制され、食料などの生活物資のほとんどが配給となっていた。戦後

寄生虫……きせいちゅう 他の生物の表面や体内にとりついて栄養素を得る生物のこと。一般には人の体内に寄生する生物のことを指すが多く、病気や栄養失調の原因となった。人糞（じんぽう）を肥料とする農耕が通例だった戦時下の日本では、多くの人が寄生虫を宿していた。√75

教育勅語……きょういくご 明治23（1890）年に天皇から国民にむけて発布された「教育ニ関スル勅語」のこと。国民の守るべき道徳、基本精神として忠君愛国の精神を中心に説いたもの。終戦に至るまで、学校教育の支柱として子どもたちに教えられた。√83

強制疎開……きやうせいそかい 空襲、火災などの被害を少なくするために、建造物や人などを、所有者や本人の意思を認めないで分散させること。√43・75・94

玉音放送……ぎよくおんほうそう 天皇（玉）が自らの声（玉音）で「終戦の詔書」を読み上げた放送のこと。昭和20（1945）年8月15日正午からラジオを通して国民に伝えられた。√51・52・55・58・77・86・96・126・134・146・154・177

警防団……けいぼうだん 戦時中、地域の消防や防空などのために組織された団体。従来の防護団と消防団が警察署単位に統合された。

憲兵……けんべい 明治時代に創設された、陸軍大臣が管轄する軍直属の軍事警察組織。次第に活動の幅を広げ、反戦思想家やスパイ容疑者の取り締まりなどに猛威をふるったことで知られる。終戦後はGHQによって解体された。√54・74・125・165

検閲……けんえつ 国などの公権力が、表現や言論を検査し、不適当と判断したものを取り締まること。表現の自由が制約されていた旧憲法下では、内務省や通信省などが管轄し、警察（特高：特別高等警察）や軍（憲兵）などによってさまざまな検閲が行われた。とくに戦時下では、個人の信書なども対象とされ、疎開した児童と保護者とのあいだの手紙や葉書も、教師たちによって検

開されていた。
▼22・76

五・一一五事件、二・二六事件……いぢけん・に・にろくけん 第一次世界大戦後の経済恐慌などの社会不安の元凶を政治家や実業家であるとする青年将校らが首相官邸、警視庁などを襲撃した反乱事件。昭和7（1932）年5月15日と、昭和11（1936）年2月26日におこった。
▼17・57・62・103・156
▼「**二・二六事件と港区**」18

高射砲……こうしゃほう 航空機を射撃するための火砲。海軍では「高角砲」と呼んだ。高台や広場に設置されたが、高高度を飛びB 29に対しては弾が届かなかった。
▼25・31・83

国賊……こくぞく 戦争や国家に対して批判した人を非難する語。非国民ともいった。こついった言葉が、戦争に対する異論を許さず、同調する空気を作り出した。
▼125

国民学校……こくみんがっこう 昭和16（1941）年公布の国民学校令により尋常小学校を改称した初等教育機関。皇国民の基礎的訓練が目的と位置づけ

小型の爆弾。安全ピンを抜くと一定時間後に爆発するようにできている。「てりゅうだん」とも呼ばれる。
▼55

傷痍軍人……しょういつぐんじん 戦闘で傷を負った軍人（兵士）のことで、厳密には軍人恩給法による増加恩給・傷病年金・傷病賜金の受給権有資格者を指す。
▼46・174

焼夷弾……しょういつだん 燃えやすい焼夷剤（重油・揮発油など）を入れた爆弾。日本への空襲でアメリカ軍が多用した。焼夷剤の種類によって油脂焼夷弾、エレクトロン焼夷弾、黄燐焼夷弾などがある。
▼26・27・28・31・38・61・68・81・94・105・125・143・151・161

召集令状（赤紙）……あがみ 兵隊を召集するための令状のこと。この紙1枚で国民は指定の期日に兵営に出頭しなければならず、違反すると罰則もあった。臨時召集令状の色が赤だったので一般に赤紙とも言われた。
▼17・19・74・173

照明弾……しょうめいだん 夜間の攻撃、飛行機の離着陸、偵察のために、地上

られた。昭和22（1947）年まで存続。国民学校は1〜6年生、その上に高等小学校に相当する、2年間の高等科もあった。
▼41・43・46・48・57・73・124・132・141・162

国民服……こくみんぷく 国民生活の合理化・簡素化のために常に着るべきものとして、国民服令によって昭和15（1940）年に制定された服のこと。軍服と同系色でなかなか普及せず、昭和19（1944）年ごろになって広く男子に着用されるようになった。
▼39・73

国家総動員法……こっかそうどういんぽう 戦時（事変）に際して「人的及び物的資源」を総動員して使うことができる」と定めた法律。昭和13（1938）年4月1日公布、5月5日施行。
▼35・37・46・57

さ

G HQ……敗戦後の昭和20（1945）年から昭和27（1952）年まで日本を占領し統治した、連合国の総司令部（General Headquarters）の略称。ポツダム宣言を執行するため、日本の非軍事化を行うとともに、政教分離や財閥解

の闇を数秒ないし数分にわたって照らす砲弾。
▼164

真珠湾攻撃……しんじゅわんこうげき 昭和16（1941）年12月8日に、ハワイのオアフ島真珠湾のアメリカ海軍へ日本軍が行った攻撃。同じ日に、イギリス領マレー半島 現・マレーシアへも上陸作戦を敢行。すでに日中戦争を戦っていた日本は、これらの戦闘によりアメリカやイギリスなどの連合国との戦争にも突入した。
▼23・57・92・103・104・132

進駐軍……しんちゆうぐん 日本の敗戦に伴って日本に駐留した占領軍のこと。敗戦の衝撃を少しでもやわらげるため、日本政府は「占領」の語を避け、進駐軍と呼んだ。
▼77・96・114・169

すいとん 小麦粉を水でこね、汁で煮込んだ食べ物。戦争中食べ物が不足し、その応急策として主食の代用として食べるようになった。
▼115・135

接収……せつしゅう 個人の所有物などを国家などが強制的に取り上げること。アメリカ軍は、日本を占領統治する際、使用に適した建物を次々に接収した。

体、農地改革、労働組合法の制定や教育の民主化などの政策を日本政府に指示した。アメリカの主導によって運営され、本部は日比谷に置かれたが、港区内の旧軍施設も多くが接収され、現在の在日米軍基地へと繋がっている。
▼54・62・63

ジープ……第二次世界大戦中、連合国の軍用車両として広く運用された四輪駆動車。耐久性と走行能力が高く、軍事戦略上でも多大な成果を挙げた。終戦後の日本でも、進駐軍が使用した。

▼97・114・151

市電・都電……しやんとでん 東京都が運営する路面電車。私鉄による路面電車を、明治44（1911）年から東京市が運営を引き継いで〈市電〉が誕生し、昭和18（1943）年に都制が施行されてからは〈都電〉と呼ばれた。戦後の最盛期には、営業距離213キロメートルを走る日本最大の路面電車網となつて、戦後の復興や経済の成長を支えた。
▼82・95・101・152・162

支那事変……しなじへん 「日中戦争」を参照。
▼24

公共の建物や会社などの大きな施設だけでなく、個人宅なども対象となった。
▼54・58・62・104・156・169

零戦……ぜろせん 零式艦上戦闘機の略称。第二次世界大戦中、日本海軍が主力艦上戦闘機として運用し、特攻機としても使われた。本来は「れいせん」と読んだが、当時から「ぜろせん」とも呼ばれた。
▼43

戦災孤児……せんさいこじ 戦災で両親を失い、身寄りのなくなった子ども。収容施設も作られたが、終戦後に行き先を失った戦災孤児が駅舎、地下道に集まり社会問題となり、「浮浪児」と呼ばれた。
▼77・88
▼「**コラム** 3：戦災孤児」86

千人針……せんにんはり 戦場での無事を願つて、木綿の布に赤い糸で千の結び玉をつくつて弾よけのおまじないにしたもの。親族の女性が街頭で道行く女性に協力してもらい出征兵士に贈るのが通例であった。
▼36・124・163
▼「**コラム** 18：千人針」162

ソ連……それん ソビエト社会主義共和国連邦の略称。大正6（1917）年に

従軍看護婦……じゅうぐんかんごふ 軍隊に従つて戦地へ出勤し、医療活動を行う女性看護師のこと。正式な名称は、日本赤十字社救護看護婦、陸軍看護婦、海軍看護婦など。日本赤十字社看護婦養成所を卒業した者は、召集されれば応招する義務が課されたため、召集状は〈女の赤紙〉とも呼ばれた。
▼73

銃後……じゅうご 銃で戦う戦場の後方のことで、直接の戦闘には関わらなくても、間接的に戦争へ参加している一般国民の生活を指す。〈銃後の戦い〉〈銃後の守り〉といった言葉で、国内にいる女性や高齢者、子どもたちが、戦地で戦う兵士たちを支えなければならないと、呼びかけた。
▼35・36・46・125

絨毯爆撃……じゅうたんばくげき 絨毯を敷き詰めるように無差別にある地域一帯を爆撃すること。
▼25・26

出征……しゅっせい 軍隊の一員として戦闘が行われている地域に行くこと。広義では軍隊に入ることを目指す語としても使われた。
▼71・72・112・151・162・173

手榴弾……しゅりゅうだん 素手で投げる

世界最初の社会主義国として建国された。平成3（1991）年の解体によつて、連邦を構成していた15の共和国が分離・独立した。
▼49・50・52・58

た

大本営……だいほんえい 戦時中に設置された天皇直属の最高戦争指導本部。
▼50・74・83

代用食……だいようしょく 米や麦などの主食の代わりに食べる食品のこと。特に米の代わりにする芋類、麺類など。
▼115

竹やり……たけやり 切り出した竹の枝葉を落とし、先端を斜めに切つて作ったやりのこと。戦時下では、陸軍でも兵器とされる一方、すべての国民が兵士として戦つことを想定した、本土決戦の武器として位置づけられ、子どもから大人まで、〈竹槍術〉ののつた訓練を行った。日本が国際連盟を脱退した昭和8（1933）年、当時の陸軍大臣が海外向けの記者会見で「竹槍三百万本あれば列強恐るるに足らず」と発言したことは有名。
▼46・73・97・109・163

建物疎開 …… たてものそかい 空襲のとき、火災による被害を少なくするために、人口密集地や軍需工場周辺の建物を強制的に取り壊した。建物強制疎開ともいう。√ 28・32・66・82・92・94・95・135 √ コラム 5 …… 建物疎開 94

徴兵 …… ちようへい 国民に兵役義務を課して、強制的に軍隊に入隊させる制度。日本では明治6（1873）年の徴兵令発布により実施。基本的には満20歳以上の男子が対象であったが、戦局が悪化するにつれて、徴兵年齢や猶予期間が引き下げられた。√ 17・19・21・74

（女子）挺身隊 ……（じょ）ていしんたい 女子勤労挺身隊のこと。戦局悪化による労働力不足を補うために、男子に代わって、一定年齢の未婚の女子を組織した奉仕団体。軍需工場などで働いた。昭和2（1927）年以降は正式には「徴集」という。√ 46・143

DDT アメリカ軍が戦争で混乱した日本の衛生状態改善のために散布した薬品。身体についたシラミなどを退治するためとして、頭から白いDDTの粉末をかけられた人も多かった。後

B 29 アメリカのボーイング社が開発した大型戦略爆撃機。当時、最も長い距離を航行できる爆撃機で、日本の大都市への焼夷弾による絨毯爆撃や、広島、長崎への原子爆弾投下を実行した。BはBomber（爆撃機）の略。√ 25・26・27・28・31・41・49・61・74・95・101・114・125

引き揚げ …… ひきあげ 日本の敗戦により、外地や海外にいた軍人や民間人が日本に戻ったこと。√ 43・52・53・86・137

プロパガンダ 特定の思想や行動へ仕向けようとする情報宣伝活動のこと。国民の戦意を高めるためのプロパガンダが、戦前から戦にかけてさかに行われた。新聞や雑誌、ラジオ、ポスターなどを総動員して、「鬼畜米英」「欲しがりません勝つまでは」といったフレーズが連呼される一方、軍の最高司令部による〈大本営発表〉が虚偽の戦果を公式に伝え続けた。√ 66・73

防空壕 …… ぼうくうごう 空襲の被害を避けるための穴や地下室。各家庭が庭などを利用してつくり、空襲警報が鳴ると避難した。しかし構造が不十分な場合も多く、避難しても内部で死亡する

に有害性が指摘され使われなくなった。√ 115

灯火管制 …… とうかかんせい 夜間の敵機の来襲に備え、各家庭で窓や電灯を布などでおおって、戸外に光がもれないようにした統制のこと。√ 27・38・144・163

東京大空襲 …… とうきょうだいくうしゅう 一般に昭和20（1945）年3月10日の空襲を指す。一晩でB 29が300機以上来襲、1千500トン以上の焼夷弾を落とし、上野、浅草、深川などの「下町」が焼き尽くされ、約10万人の死者、100万人以上の罹災者が出た。同年5月24、25日に東京の「山の手」を襲った大規模な空襲（東京山の手大空襲）も指す場合がある。√ 27・28・31・34・58・105・111・121・161

東京山の手大空襲 …… とうきょうやまのてだいくしゅう 昭和20（1945）年5月24日、25日の空襲。24日が約560機のB 29、投下された焼夷弾は3千600トン余り、25日は約500機、3千300トン余りと記録され、赤坂や青山などの東京の「山の手」（高台が標的になった。死者は両日をあわせ東京全体で4千人余りとされている。

ことが少なくなかった。√ 27・43・73・86・101・126・134・144・151・163

防空演習 …… ぼうくうえんしゅう 空襲の被害を防ぐために、〈隣組〉という地域の住民組織を中心に、在郷軍人や警察、婦人会や青年団などが指導して行われた実地訓練のこと。バケツリレーなどの防火訓練、待避訓練、救護訓練などの内容だったが、焼夷弾による実際の空襲時には、水をまいたり火を叩いたりしても、ほとんど効果がなかった。√ 46・73・83

捕虜 …… ぼりょ 戦争などで敵に捕らえられた人。ジュネーブ条約（赤十字条約）により、人道的な待遇が定められているが、満州などでソ連軍の捕虜になった日本兵や逮捕された民間人は、シベリアなどの過酷な環境下で強制労働に従事させられたシベリア抑留。また日本人による捕虜虐待も戦後戦争犯罪として問題になった。√ 22・52・74

ま

満州事変 …… まんしゅうじへん 昭和6（1931）年9月18日、日本軍が南満

√ 27・28・31・58・61・81・151

特攻 …… とうこう 特別に編成して攻撃することを意味し、特に太平洋戦争末期に行われた日本陸海軍による体当たりの自爆攻撃を指す語。出撃すると生還の見込みがないことから「十死零生」といわれた。√ 20・22・50・75・181

隣組 …… となりぐみ 昭和15（1940）年、国民を統制するため従来の町内会活動を基盤に10軒くらいを1単位としてつくられた地域組織。戦争遂行のためのさまざまな指示事項の伝達、互助、自警、配給などにあたった。昭和22（1947）年に廃止された。√ 36・73・193 √ コラム 1 …… 隣組 72

な

日中戦争 …… にっちゅうせんそう 昭和12（1937）年の盧溝橋事件から日本の敗戦まで続いた日本と中国の戦争。当初は、日中ともに偶発的な軍事衝突に過ぎず戦争ではなく「事变」と呼んだ。日本では「支那事变」と呼んだ。「支那」は当時の日本での中国の地理的呼称。昭和6（1931）年の満州事

州鉄道を爆破した柳条湖事件に端を発した日中の軍事衝突。時の若槻内閣は不拡大方針を採ったにもかかわらず、現地の関東軍はそれを無視して満州地方を占領。翌年には「満州国」を建国する。√ 23・24・57・82・104

もんぺ 足首を絞って動きやすくした、ズボンのような作業用の衣服。着物やスカートでは裾が開いてしまい、消火や避難などの活動をしにくいいため、すばやく動けるよう戦時下で推奨され、女性の日常着となった。√ 39・46・73・175

や

闇市 …… やみいち 物資の統制による正規の配給ルートを通さずに流通する違法な物資を売買する市場。敗戦と同時に都市の駅前などで自然発生的に生まれた。東京では上野や新宿、新橋などに大きな闇市があった。√ 52・68・77・87・107・131・136・137・147

ら

練兵場 …… れんべいじょう 兵士に対し戦闘に必要な訓練をする場所。現在の明

変からの一体性を重視する見方もある。√ 15・23・24・27・35・36・37・52・57・82・92・124・142・158・173・176

ノミ、シラミ、南京虫 …… のみ・しらみ・なんきんむし 人などに寄生し血を吸う小さな害虫で、伝染病を媒介することも多い（南京虫はトコシラミの通称。かまれると痒くなり、かくと化膿することもある。入浴や洗髪、洗濯などが困難だった、戦時下の不衛生な状態で大発生し、とくに疎開先の子どもたちが悩まされた。√ 42・75・115

は

配給制度 …… はいきゅうせいど 統制経済のもとで、特定商品の一定量を、特別な機関や方法によって消費者に公平に売ること。戦時下では物資不足により多くの物資が配給制となった。√ 37・52・127

バラック 地震や戦災で家屋が倒壊した際に、ありあわせの資材で作った簡易住宅を指す。駐屯兵のための簡易な細長い兵舎を指す場合もある。√ 29・77・87・91・101・147・154・156

治神宮外苑、神宮球場、国立競技場等があるエリアにあった〈青山練兵場〉が、明治42（1909）年に代々木へ移り〈代々木練兵場〉となった。代々木練兵場は、表参道周辺の住民が空襲に避難する場所の一つとされたが、戦後はGHQに接收され〈ワシントンハイツ〉となり、返還後は代々木公園やNHK放送センターなどが設けられた。√ 15・16・56・57・84・151・156

盧溝橋事件 …… ろくきやうせいきん 昭和12（1937）年7月7日に、北京郊外にある盧溝橋付近で日本軍と中国軍が衝突して、日中戦争の始まりとなった事件。何者かによる日本軍への発砲をきっかけに交戦が起きたが、政府や軍は自衛のためとして陸海軍を増派し、宣戦布告を行わないまま、事実上の戦争へ突入した。√ 23・57・104

監修

慶應義塾福澤研究センター
都倉武之

取材協力

公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団
港区立生涯学習センター（ばるーん）
SSSポート財団

学校法人慶應義塾

慶應義塾福澤研究センター

株式会社日比谷花壇

有栖川宮記念公園

港区語り部の会

港区立郷土歴史館

株式会社山陽堂

山陽堂書店

資料協力

一般社団法人共同通信社
一般社団法人ジャパンアーカイブス
学校法人慶應義塾 慶應義塾広報室
学校法人慶應義塾 慶應義塾福澤研究センター
株式会社山陽堂
株式会社時事通信フォト
株式会社TOKYO TOWER
株式会社毎日新聞社
株式会社優美レンタル
株式会社レゾナック 川崎事業所
公益財団法人政治経済研究所付属 東京大空襲・戦災資料センター
公益財団法人東京都公園協会
公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団 SSSポート財団
公益財団法人野球殿堂博物館
公益財団法人吉田秀雄記念事業財団 アドミニアム東京
国立国会図書館
在日米国外使館
昭和館
世田谷区立郷土資料館
千葉県立中央博物館 大利根分館
中央区立郷土資料館
東京都北区立中央図書館
東京都中央区
東京都港区教育委員会
東京都立中央図書館
独立行政法人国立公文書館
独立行政法人国立公文書館 アジア歴史資料センター
独立行政法人国立公文書館 国立映画アーカイブ
独立行政法人国立美術館 国立新美術館
虎造節保存会
港区立郷土歴史館
有限会社随想舎
(敬称略・五十音順)

平和の願いをこめて 2025

— 今、語り継ぐ 戦争の体験 —
港区戦争・戦災体験集 第4集

令和7(2025)年3月31日 発行

発行 港区総務部人権・男女平等参画担当
〒105-8511 港区芝公園一丁目5番25号
電話 03-3578-2111 (代表)

発行番号 2024275-6421

制作協力 株式会社文化工房



港区平和都市宣言 40周年ロゴマーク

区の花であるバラを平和の象徴であるハトの羽が丸く囲うデザインとし、「40」の0にも見立てています。様々な品種や色が存在するバラは、人それぞれ様々なかたちの「へいわ」を、5枚の羽根は世界五大陸を表し、丸くつなげることで世界平和への願いを込めています。



区の木 ハナミズキ



区の花 アジサイ



区の花 バラ



港区は、みどりの保全とごみの減量に努めています。
この印刷物は、古紙を活用した再生紙を使用しています。

イラスト 村林タカノブ
デザイン clip